

加藤周一の〈雑種文化論〉 有田英也

「憧れ」は古い日本語で「あく離（か）れ」と書き、「心が身体を離れる」ことを意味する。異国を思う気持ちと、異国で祖国を思う気持ちには通じるものがあるだろう。

加藤周一（1919-2008）は血液学を専攻する医師として、1951年10月から1955年2月まで、フランス政府の給費を受けてパルツール研究所に留学した。このことを後年の自伝『続 羊の歌』で、次のように回想する。「一九四五年の秋に、戦後日本の社会へ向かって出発した私は、五一年の秋に、西洋見物に出かけた。これが私の生涯における第二の出発になった」。すでに現代フランス文学の紹介で作家として知られていた加藤は、おそらく生活費を得るために『西日本新聞』と契約して、フランスから見聞を日本に書き送った。

「西洋見物」の往路は飛行機だったが、復路は予算のためもあってか貨客船。ゆっくりと帰途についた加藤は、アジア諸国の港の景色を見ながら、後に大きな反響を起こすことになる文章を着想した。それが、帰国早々1955年に相次いで発表された「日本文化の雑種性」（『思想』6月号）と「雑種的日本文化の希望」（『中央公論』7月号、初出では「雑種的日本文化の課題」、いわゆる「雑種文化論」である。「第二の出発」は、船が製鉄業の盛んな北九州から瀬戸内海に入ったときに訪れたようである。

そこには、「英仏の文化は純粋種であり、それはそれとして結構である。日本の文化は雑種であり、それはそれとしてまた結構である」という、どこか開き直ったような言葉がある。加藤の最初のヨーロッパ滞在の成果ともいえる「雑種文化論」の真意は、どこにあるのだろうか。「希望」とはどういう意味だろうか。